

# 今年も午年

## 馬にも良草を



八戸の八幡駒

今年も60年に一度という「ひのえうま」で人間社会では迷信、因襲でとかく話題となっておりますが、ご本尊の馬さんはそれこそ馬耳東風、ただ良草を期待しているようです。

草地の造成、飼料栽培といえど酪農、つまり乳牛との結びつきのみを考えがちですが、乳牛以外の家畜は勿論家禽まで、健康のため、また生産コストの低減に牧草、飼料作物が重要欠くことの出来ないものであることを今一度考えてみたいものです。

- ・肉牛の若令肥育にも草地を造成して、もっと有利な育成をしようとする動き
  - ・豚特に繁殖豚にはもっと牧草や飼料作物を食わせて繁殖成績を向上し、飼育費を低減しようとする動き
  - ・鶏の耐用日数を延長するための生鮮緑餌の給与等々
- あらゆる家畜は良草を待望し、これによって一層我々人間に数多くの恩恵を施さんとしております。

草と家畜の関係、今更ながらとも思われますが、午年にちなんで、数々の駿馬を産んだ広沢牧場の馬にスポットライトを当ててみましょう。

◎東北地方で軽種馬生産で著名な広沢牧場は明治初期元会津藩士広沢安任氏が青森県三沢市に3,200畝の開きんに始まった。

◎馬の導入は二代広沢弁二氏によって行なわれ、氏は産馬改良とともに日本競馬協会の創始にも活躍され、爾来協同経営者佐久起氏、三代春彦氏、現四代一任氏と終始一貫軽種馬の育成が続けられている。

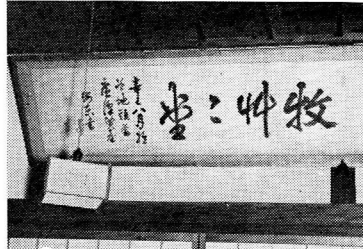
◎戦後の農地解放で現在は土地面積もグント少なくなっているが、サラブレッド基礎馬8頭を含めて20



広沢弁二氏の像

頭前後の飼育を行なっている。

◎名馬はどうして生産されたか、勿論広沢一家の熱意によるが、その一つに牧草栽培がある。明治初年、草といえど野草(まぐさ)であった頃、すでに牧草の重要性に着目。自らの邸を「牧草の堂」と名づけて近在近郊の人を牧草に親ませ、また諸外国から取り寄せた牧草の試作栽培も行ない、その経緯を書に託して「六十九種草堂」の



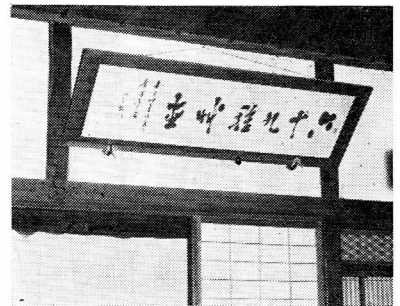
明治初年早くも牧草の栽培に着目

書架が大座敷に掲げられているのを見ても、牧草栽培に対する関心の度合いが推測される。良草即産駿馬を地で行かれたと拝見できる。

◎現在は、牧草を中心として大豆、デントコーン、ひえ等を栽培しているが、牧草はオチャード、ラデノクロバー、赤クロバー、白クロバー、メドウフェスク、Hワンライの混播を行なっている。

◎研究熱心な広沢牧場では更に良草の生産をと努力を続けておられるが、特にルーサンの栽培と、牧草の優良品種の導入を計画されており、これの実現によって更に名馬が産れるのでありましょう。

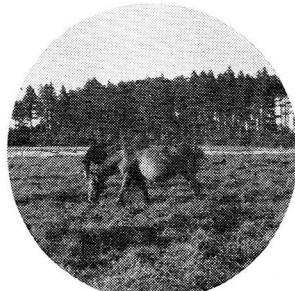
馬さん、牛さん、今年も雪印のたねから育った良質の飼料を食べて、元気よくどんどん繁殖して下さい。



草なく駿馬出す諸外国から牧草を導入



良草を食んでいるサラブレッド



更に良質牧草の生産への努力が続けられている